

熱戦のエピローグ③

@木ノ道中

オオスカシバ

「やったー、加賀さんからの依頼だ！」

桃花は月乃のスマホを持ったままベットにダイブした。木ノ道中の加賀さん、彼女は二人が試合をしてきた数多くの選手の中でも格別の存在だった。「真のライバル」といえる存在である。どういうわけか涼花か桃花と当たる確率が多い。桃花が「運命の赤いラバーでスマッシュを打ってきた人」と名付けていた。

(依頼主 木ノ道中 加賀 珠美)

依頼内容 セラピーロボの被験者になつてもらおう

持ち物 家の人の許可

報酬 私の兼部先、ものづくり部の菓子パ招待

※試合は学校近くの卓球用品店でできます)

「あの加賀さんがロボット開発者？」

桃花は加賀さんの名前を検索してみることにした。月乃は検索履歴を消していなかった。こっそり履歴を見たが、大学関係のワードばかり。(つまらないやつだな)と思ってしまった。

加賀さんは相当の技術の持ち主であることが分かった。ここ数年のネットニュースの記事もあがってきた。インタビュー記事を見ると、父親も工学部の教授らしい。「ほえー。加賀さんすごい！」

桃花はもう興奮マックスだった。心臓をバクバクさせながら涼花に電話を掛けた。

「ねえねえねえ涼花、加賀さんから依頼だよ！」

「例の運命の相手？」

「そうだよ。もう最っ高」

「で、依頼内容は？」

「それがさ、加賀さんがプロ級のロボット開発者っぽくて、自作のセラピーロボの被験者になつてほしいって」

「加賀さんは有名人だったのか……めっちゃ楽しそう！」

「そして試合もできる」

「完璧すぎ！」

電話の向こうで涼花の声がキンと頭に響いた。

加賀さん、それは二人、特に桃花に大きな影響を与えた人物だった。彼女が初めて二人の前に現れたのは、一年生の秋だった。ブルーギルズを結成する少し前のことだった。申し込み試合で二人とも彼女と当たり、勝っていた。三月の大会で、涼花が加賀さんと当たった。

「木中の中では手ごたえがある方だけど、データは十分にあるし、油断しなければいけるかな」

部活ノートを見ながら、涼花は桃花に言っていた。桃花の方も、一度勝った相手に負けるはずがないと高をくくっていた。

が、数か月越しに出会った加賀さんは違った。申し込み試合では一ゲームの獲得もさせずに終了した試合は、気が付けば最終ゲームまで行われていた。先にマッチポイントを取られるも、涼花は驚異の挽回力でジューズに追い込んだ。そこからもなかなか決着がつかなかったが、惜しくも負けてしまった。

「私の実力不足だった。もっと研究しなきゃね。次に当たった時は絶対に倒してやるんだから！」  
折れることなく立ち上がった涼花に、桃花は感心させられた。

二年生の春体での団体戦、木ノ道中と当たった。二番手で出された桃花は加賀さんと戦うことになった。自分が涼花の仇を討ってやるんだ！ と気合を入れていた。しかし、涼花のような試合には到底及ばなかった。涼花や先輩が勝ちをつかみ取ったものの、自分が負けたせいで敗退となってしまった。自分は涼花とともに勝ちをとる存在でなければならぬのに、活躍できなかった。その夜、自分の部屋ですっと泣いていた。心理戦という根拠のない自信に任せていては成長は止まってしまうということを気づかせてくれた相手だった。

「加賀さんのお父さん、多分うちの大学の教授にいるよ」

集合場所に向かう前に寄ったパスタ屋で料理を待っている時、月乃が言った。

「えっ、お姉ちゃんその人に教わってるの？」

桃花が驚いて聞いた。

「いや、教育学部の国語専修には無縁だね。工学部の友達が名前挙げてたくらい」

「なんだ……」

桃花はがっかりして、顎をテーブルにつけた。

「お友達からの評判はどうなんですか？」

涼花が聞いた。

「特に嫌われてるとかじゃないけど、謎が多いとか言ってたかな」

「謎って言うのは？」

「あんまり自分のこと話さないみたいで、生憎不明的な」  
「なるほど」

娘だけでなく、父親も興味深い人だなと思った。そこへ店員が山盛りのパスタを乗せたワゴンを引いてきた。三人そろって注文したシーフードパスタを堪能した。

月乃の送迎で、二人は卓球用品店に行った。小さい店のくせに「浜塚卓球」という、いかにも市最大規模を名乗っているかのような店である。二人でその批判をしていると、加賀さんが自転車で颯爽と現れた。大会で見ると

同じユニフォームを着ていた。六月は暑い。ユニフォームのままでは街中を移動しても変な目で見られない時期だ。二人もさつきユニフォーム姿でパスタ屋にいたくらいだ。「どうも、加賀です」

彼女はブレーキをかけると同時に地面に着地し、勢い余って何歩か進んだところであいさつした。

「こんにちは」

二人もお辞儀した。

「試合をしつつ、依頼の詳しい内容とか教えますね」

加賀さんはそう言うと、二人を店の中に案内してくれた。木中生にとつてここはなじみの場所のようだ。せまい販売スペースに、多種多様なラバーや、整備用品が所狭しと陳列されていた。レジにも様々なフォントのゼッケンが飾られていた。ラバーの独特なお鼻が入ってきた。

「ここで練習ができるんですよ」

暑苦しい売り場とは隔離された部屋には、三つほど台が置かれていた。男子高校生と思われる二人組が、シューズの摩擦音を立てながら練習している。暑苦しくはないが熱い空間だった。

「私たちはここにしましょう」

真ん中を開けて出入り口側で試合をすることにした。涼花がうずうずしていたので桃花は先に譲ってあげた。屈辱の負けを味わった彼女はしっかりとパワーアップし

ていた。加賀さんのミスを導いていき、苦戦する様子を見せることなく倒してしまった。その余裕っぷりが桃花にプレッシャーを与えた。

入れ替わりで桃花が台に入った。加賀さんはまだスタミナが有り余っている様子だった。桃花は深呼吸をした。あの日から何もしてこなかったわけじゃないんだ！と自分を奮い立たせた。じゃんけんで勝ち、自分にサーブ権が回ってきた。追い風が吹いてきた、と思った。

(私の作品を発表する時が来た)

実行の時だ、と胸が高鳴った。

桃花は、回転をかけずに、相手の腹ぎりぎりまで伸びるロングサーブを繰り出した。スピードもかなり出ていた。加賀さんは予想に反して正面に打ち込まれた球に怯み、レシーブのコントロールが乱れてしまった。球が弱く浮き上がった。そして、強力な一撃を打ち込んだ。

(バカな！)

加賀さん、そして涼花までもが驚愕した。非常に型破りな戦いだ。涼花や桃花が使うラケットの場合、下回転のサーブを、できるだけネット寄りに落とすと、有利に攻撃に繋がられるとされている。桃花はその常識を裏切るプレーをした。

(決まった、私の技その一、『閃光槍』)

試合をしながら、自分のワールドにどっぷり浸かっていた。加賀さんから球を受け取り、再びサーブの構えを

取った。

(私の比喩、もつと聞かせてあげる)

今度は球の七時の位置をラケットでこすった。相手コートに落ちた球は、突然軌道を変え、白い鯉が体をくねらせるようにカーブしていった。加賀さんはサーブを拾うことすらできなかった。

(技その二、『白鯉』成功)

そのあとも、長さや速さを少しずつ変えたサーブをいくつも使い、加賀さんを翻弄していった。自分が相手の動きを見抜こうとするのでは結果は安定しない。ならば自分のプレーを見抜かせないようにすればいい、ということに気がついた。技を増やせばいい。けれど、ただ新しいサーブを習得するんじゃつまらない。自分らしさを出したいと思った。涼花が研究者のように相手の技を分析するなら、私は詩人が作品を生み出すように、自作のサーブに名を与えて極めるのがよい。華麗に攻め、欺く試合をしようと決意したのだった。

加賀さんは桃花の動きを全く予測できず、本領を発揮することができなかった。桃花は悲願の勝利を手にした。

「負けちゃいましたね」

加賀さんは汗を拭きながら悔しがった。

「でもなんか清々しいですね」

しかし、二人と再戦できて満足げだった。

「本題に移りましょうか」

三人で壁に寄りかかって座ると、説明を始めた。

加賀さんは、ペットの代わりともいえるセラピーロボを開発したのだが、動作を確認してもらうための協力者が集まらないとのことだった。

「ごめんなさい。私人脈に乏しいから、ものづくり部の部員三人とクラスの仲いい何人かにしか手伝ってもらえなくて」

製作費がかかってそうなロボを、責任もって預かれる家庭なんて少ないんだろうなと思った。ペットを飼っている家庭とか、じやれて壊してしまうリスクなんかがあるかもしれない。

「二人に一日ずつ預かってもらって、行動とかを記録してもらいたいんです。どんな環境でも問題なく動くか調べたいので」

「楽しそう！」

桃花が目を輝かせた。

「どんな動物なんですか？」

涼花が聞いた。

「まだ秘密です。きつと二人とも驚くと思います」

二人は楽しみで仕方がなかった。

自転車を押して歩く加賀さんに連れられて、二人は木ノ道中に向かった。加賀さんは、ものづくり部の話や、クラスでの珍事件について話してくれた。いつもの依頼では、スキマ時間に卓球部の話をすることが多いので、このパターンは新鮮だった。本音では木中女卓の裏話を聞きたかったところだが。

加賀さんが先に校舎に入っていくと、来賓者用の札を取ってきてくれた。二人はそれを首にかけて部室に向かった。加賀さんが教室の鍵を開けると、そこには三人の部員がいた。ラジコンのようなものを操作する男子、木を切断している男子、布に刺繍を施している女子がいる。

「お客さんを連れてきましたー！」

三人が作業を止めて集まってきた。各々自己紹介をした後、ものづくり部について説明してくれた。男子二人は一年で、女子は加賀さんと同じ二年生なんだとか。

「今連れてきますね」

そう言うとか賀さんは準備室に入っていた。やがて戻ってきた彼女の腕には、水色と白の毛におおわれた生き物が抱えられていた。高い鳴き声を上げると、翼をばたかせた。鳥のように思われたが、長い首と尻尾を持つていた。脚は車輪になっている。

「おまたせしました。ワイバーンの子供型ロボ、ネモフイラちゃんです」

「ワイバーン？」

桃花はその生き物が何なのかを知らなかった。

「こういう、翼をもった龍のことです」

「へー、龍にも種類があるんですね」

「でもどうしてワイバーンにしたんですか」

「ありふれた動物にするより、架空の生き物を、実在するかのように作った方が楽しいじゃないですか」

加賀さんは興奮気味に言った。多少本人の趣味が入ってるんだらうな、と桃花は思った。

「撫でもいいですか？」

涼花が加賀さんに聞いた。

「ぜひどうぞ！」

「かわいいー！」

もふもふの頭に触れると、瞼を閉じて気持ちよさそうに首を曲げた。機械音はするが、動きはしなやかだ。

「キュルル」

ネモフイラちゃんは声をあげた。胸に埋め込まれたライトが、ピンクに光った。

「あつ、リラックスしてるみたいですよ」

加賀さん曰く、感情によってライトの色が変わることだった。調査する時の参考にしてほしいということだ。自作の説明書も渡してくれた。かなり手の込んだロボで、人の顔を認識し、声を聴き分け、ちよつとした芸も覚えるらしい。

「ネモちゃん、癒されますよね」

二年生の女子、高坂翠さんが話しかけてきた。  
「あっ、私は今、この子のためにスカートを作ってる  
ところです」

「見てもいいですか？」

二人は彼女がどんな作品を作っているのか知りたくな  
った。

「花のネモフィラの刺繍をしてあげようと思って」

若草色の布に、繊細な花卉が描かれていた。二人は見  
とれてしまった。絵でも描くのは難しいはずだ。それな  
のに刺繍でここまでリアルに作るのには相当な技術が求  
められる。

高坂さんが突然せき込みだした。すると、床を歩いて  
いたネモフィラがやってきて、心配そうに鳴き声を上げ  
た。彼女は、抱きかかえると、椅子に座って撫で始めた。  
喘息の発作のようだ。

「苦しい？」

加賀さんも彼女の背中をさすってあげた。

「あんまりひどくなかったみたい。ネモちゃんのおかげ  
でちよつと楽になった」

「二人とも驚かせちゃってごめんなさい。私、体が弱い  
んです」

少し息を切らしながら打ち明けた。

「私が元気だったら、たまちゃんと卓球部でも一緒にな  
れたのにな」

加賀さんは窓の外を見て、なにか悩んでいるかのよう  
な、悲しそうな顔をしていた。

桃花が最初に調査を引き受けることになった。春山家  
に入ると、ネモフィラはあたりを見回していた。懲りず  
に何度も窓ガラスに激突しては、ライトを青く光らせて  
悲鳴をあげていた。母親もすっかりネモフィラを溺愛し  
ていて、抱っこしては赤ん坊のようにあやしていた。

「桃花も小さいころ窓ガラスに激突して泣いたことある  
のよ」

と教えてくれた。

「あー、叔父さんの結婚式の」

月乃も知っているようだった。桃花は何も覚えていな  
かった。

「ペットは飼い主に似るっていうからね」

母は桃花をからかった。

「まだ何時間かしか生活してないじゃん」

恥ずかしくて、むきになって反論した。

父が、そのハプニングを捉えたビデオを発掘してくれ  
た。会場ではしゃいってしまった桃花が、ガラスに気づか  
ずにフルスピードで体当たりしてしまった。その場に座  
り込み、大泣きした。両親と月乃は大爆笑していた。ネ  
モフィラも不思議そうな顔でテレビを見つめていたが、

家族が笑っているのを見ると、ライトを黄色く光らせながら羽ばたいた。「おもしろい」という感情を理解していることが分かった。

夜、月乃も桃花も、ネモフィラと一緒に寝たいと、軽く言い争いになった。もめていると、二人の足元に割り込んできて、互いを引き離そうとした。

「三人で寝るか」

取り合いはやめて、月乃の部屋の床で寝ることにした。間にネモフィラを挟んで触れ合っているうちに、眠ってしまった。両親がこっそりのぞきに来た。

「もー、電気つけっぱなしにして！」

母はすぐに消そうとした。

「待って待て。なんかこの光景、懐かしくていいじゃないか」

「そうね。いつ以来かしら？」

「桃花は六つ離れた月乃にべったりだったからな」

「自分の部屋で寝られるようになるまでだいぶ時間がかかったものね」

「変わらないんだな、姉妹って」

「そうね」

「いい夢見ろよ」

そう言うってから明かりを消した。

翌日、涼花にバトンタッチするため、車輪のホコリを取ってあげることにした。ウェットティッシュでこすら

れている間、ネモフィラは大人しくしていた。

「幼龍なのに、お行儀いいね」

桃花が腹側の白い毛をもふもふさせながら言った。

「けんかしてた私らよりずっと大人かもね」

そう言いながら、月乃が使用済みティッシュをゴミ箱に向かって投げた。ホールインワンにはならなかった。

「くそー！」

と悔しがった。

「お姉ちゃんおこちゃまだな」

桃花が囁し立てた。ネモフィラのおかげで、姉妹での充実した時間を過ごすことができた。

ネモフィラを特殊なケージの中に入れた。ここに入ると充電されるらしい。巨大なケージをトランクに詰め込み、佐原家に向かった。

春山家ではお利口さんだったネモフィラは、佐原家に来ると、態度が一変した。リビングに開放するのではなく、狭い自分の部屋に放してしまったのが悪かったのだろう。涼花は桃花たちと違ってあまり相手をしてくれなかった。というのも、彼女は部活ノートに桃花が繰り出したサーブのデータをまとめている最中だったのだ。

「ギョルー」

不機嫌そうにうなり声をあげて、床に積まれた教科書

をつつくと、山を崩してしまった。

「今忙しいんだから大人しくしててよ！」

思わず叱ってしまった。すると、ネモフィラは尻尾と首をびんと立てて、再びうなり声をあげた。ライトが赤くなつた。黒い液晶に映し出された瞳もつりあがっている。涼花の足に突進してきた。

「分かった分かった。遊んであげるから！」

まともを中断して椅子から立ち上がったものの、何を遊ばばいいのか分からなかった。

「一応、ベツトってことだし」

机に置いていたピンポン球を投げてみた。すると、すぐに走って行って、ボールをつつきだした。口が開くわけではないので、涼花のもとへ持ってくることはできないみたいだ。

「頑張ったね」

ネモフィラを撫でてあげた。ライトが黄色く光った。

この遊びが面白いようだ。

「よし、とってこい！」

涼花も癖になつてしまい、三十分近く遊んでしまった。「そうだ、芸でも覚えさせるか」

「お手」ならぬ「顎」を習得させた。涼花が手のひらを差し出したら、そこに顎を乗せるという単純なものだ。何度もやらせては、

「かわいいー」

と、一人でにやけていた。

「君、私の弟になつてもらえたりする？」

ネモフィラを抱き上げて問いかけた。言葉が理解できなかったのか、無邪気な瞳で首を傾げた。

「ごめん。性別決まってるないんだ。そうだよ、君のご主人様は珠美ちゃんだもんね」

「キュー」

彼女の名前を聞くと、ライトを黄色くさせて笑った。こんなに可愛いのに手伝わなかった人たち、人生損してるよ、と思った。

塾で綾音に話すと、彼女も調査に参加したいと言って聞かなかった。加賀さんも喜んで承諾してくれたので、ネモフィラを引き取った。よほどうれしかったのか、月乃のスマホに何枚も写真を送ってきた。ネモフィラとともに映えスポットを巡ったみたいだった。

（加賀さんに聞いたらブルーギルズの垢に載せていいって言ってた！）

というメッセージも添えられていた。スマホ持ちの女子中学生はやるのが違うなど、桃花は驚かされた。

協力のお礼として、菓子パは月乃を含め四人で行くこ



とになった。

自分たちも、お菓子を持ち寄った。涼花はポピュラーなソフトせんべい、綾音はクッキー、桃花は一口ゼリーと無難なチョイスだった。月乃はというと、

「これ『セイキョウ』で流行ってるんだ」

と、「逆ロシアンルーレットグミ」なる奇抜なお菓子を持ってきた。味が無いグミが入っている中、甘いグミを当てた人は彼氏彼女を手に入れられるとされる、占いの商品だ。

これがかなりウケた。ラジコン少年西川君が当たりを引き、大興奮していた。

「イエーイ、かわいい子が俺を待ってるぜ！」

ガッツポーズを決め込むと、

「西川はブスにしか好かれなないよ」

と、加賀さんは冗談を言った。

「もー、何言ってくれちゃってるんですか。パイセン！」

部室に笑いが響き渡った。他にも、加賀さんはモノマネや変顔を披露するなど、意外にもユーモアのある人だった。こんな人がいる木中女卓、きつと楽しいだろうな、と二人は思った。

高坂さんも今日は調子がよさそうだった。ネモフィラのスカーフの完成を報告してくれた。そして、これから練習で汗もかくだろうからと、三人に名前の刺繍入りのロングタオルをプレゼントしてくれた。

「皆さんの夏体、応援に行きますね」

唐突に予告を入れてきた。

「翠は毎回私の応援に来てくれるんだよ」

加賀さんが高坂さんと肩を組みながら付け加えた。

「いいなー、そういうの」

綾音が言った。

「でも、体に負担がかかるんで大きい声は出せないんです。だから、代わりに手作り団扇を使ってます」

「素敵！」

月乃も羨ましそうにしていた。

「仲いいんですね」

涼花が言った。

「幼馴染だもんね」

加賀さんと高坂さんが息びつたりに答えた。二つの部活に仲間がいるっていいな、と涼花は思った。

パーティーが終わり、全員で帰宅することになった。

部長の加賀さんは、職員室に鍵を返しに行くため、先に階段を駆け降りていった。四人は高坂さんとともにゆっくりと歩いた。

「あの、私からも依頼いいですか？」

高坂さんが少し緊張した様子で話を持ち出した。

「たまちゃんのことを、これからもよろしく願いま

す」

まるで自分が彼女の保護者であるかのような発言だった。

「うちら担任の先生みたいじゃん！」

綾音が得意の突っ込みを入れた。

「私たちがむしろ珠美ちゃんから色々学んでるくらいだよ」  
涼花も綾音のノリに乗った。

「春体で負けて相当悔しがってたからね。ねー桃花」

月乃が彼女の方を振り返って聞いた。

「桃花？」

あることが引つかかって話に集中できていなかった。

「えっ、何？」

やらかした、と焦った。

「はーん。さてはずっと泣いてたのが恥ずかしいんだな？」

状況を理解し、桃花は我に返った。

「桃花、あのあと泣いてたの？」

涼花が反応した。顔が熱くなった。

「だって、一ゲームも取れなかったんだもん！」

自分のコントロールが効かなくなつて、最悪な結果を

暴露してしまった。

「泣きたい時は泣いた方がいいですよ」

高坂さんがフォローしてくれた。

それから二週間後のこと。

「じゃあ、珠美、また明日」

「部活頑張つてね」

「ありがとう。じゃあね」

加賀さんは体育館へ向かった。だんだんと脈が速まってきた。体も気のせいかな、重い。

なぜ、イコールで結ばれないのだろう。翠ちゃんや一年坊主、ものづくり部の仲間と、今ここにいる卓球部の仲間。どっちも部活の仲間だよな？ 冗談なんか言つて、笑いあつて過ごせる仲間だよな？

出入り口前の通路にエナメルを置こうとすると、ちょうど同級生が二人ほど話をしている所だった。軽く挨拶をしようとしたが、彼女が口を開くタイミングも作らせずに、中へ入ってしまった。彼女は一人通路に取り残された。彼女に挨拶をしてくれるのは、まじめな後輩たちだけだ。

（今日もか。まあ、何時間か我慢すればいいだけだし、私には翠がいる。それに明日クラスに行けば、温かく迎えてくれる友達だっているもんね）

まず、総当たりでラリーをしていく。他の台では話した声も聞こえるが、加賀さんの台に来た者はずっと無言だった。

（当り前よ。練習は集中してやらなきゃ）

自分に言い聞かせた。

「十分休憩にします」

（今日は何をして生き延びようか？ もうネタがないよ）  
他の部員が通路に出て行っても、彼女は体育館に残ってサーブの練習をしていた。

（三人とも、他の部員と仲良くやってるんだろ。それが普通なもの）

加賀さんは一人寂しく帰宅した後、スマホのメッセージアプリを開いた。数日前から微熱で欠席している翠が心配だった。

すい（熱が上がってきた。咳も止まらなくて呼吸が辛い……）

翠ちゃんは救急車で運ばれ、入院しているとのことだった。

すい（夏体、応援行けないかも。ごめん）

加賀さんは頭が真っ白になった。翠のメッセージはそれきりだった。

夏体の前日、桃花が準備をしていると、月乃が部屋に入ってきた。彼女にそっと近寄ると、小さな声で、

「綾音から……」

いつもはすぐに退室する月乃が、桃花に寄り添ったままだった。不思議な気持ちでトークルームに入った。

はかまつか（単刀直入に言うけど、高坂さんが亡くなったらしい）

はかまつか（珠美からメッセージが来た）

はかまつか（二日前から知ってたけど、ずっと信じられなかった。でも、証拠も出てきて、現実受け入れるしかなかった）

新聞のお悔やみ欄の写真が添付されていた。確かに（高坂翠 十三歳）と記載されていた。住所も木ノ道中校区だった。いつの間にか頬が濡れていた。月乃が鼻をすする音も聞こえた。

加賀さんは夏体を棄権していた。なんとなく木中生の様子に気になり、スキマ時間に二人と綾音は選手の集団を探しに行った。

「まさか、こんなことになっちゃうとはね」

涼花が言った。

「珠美ちゃん、大丈夫かな？ 相当ショックだろうし」

桃花も下を向きながら言った。今にも泣きそうだった。

「あつ、あれそうじゃない？」

綾音が声をあげた。客席の中段あたりに、見覚えのあるユニフォームが見えた。人数が多く、二列も占拠して

いる。彼女たちの様子を見て、三人は不気味さを覚えた。全員が何事もなかったかのように平然とおしゃべりを楽しんでた。これだけでは、高坂さんと結びつきのある人がいなかったのかもしれない、と取ることもできるだろう。それだけではなかったのだ。

「これではばらく珠美とはおさらばね」

「うちら罪悪感なくおしゃべりできるし」

三人の背筋に寒気が走った。その生徒たちは笑みを浮かべながら言っていた。あまりの恐ろしさにはばらく動くことができなかつた。

グループの一人が、三人の方を振り返った。目を細めて見つめてきた。

「逃げよう！」

桃花が二人の肩を叩いた。三人は急いでその場を去った。

大会が終わって、バスまで歩く途中、鈴蔵中の生徒たちが

「やっと帰れるー」

と楽しそうに話している中、二人にはそうする元気もなかつた。入道雲が映える青空の下、二人の心は曇つたままだった。ミンミンゼミの合唱が悲哀を帯びていた。

あまりにもショックで、この日の出来事を必死に忘れようとした。部活の時以外に部活のことを考えないようにした。夏休みに入ってから、夜遅くまで塾の自習室で

黙々と勉強をした。忘れたふりをしていたが、体育着の木中生とすれ違つた時に珠美のことを思い出していた。依頼で珠美と関わっていた時、彼女が全く卓球部の話を持ち出さなかつたこと、桃花は未だにそれを気にしていた。一問一答プリントを解く手が止まってしまった。

「春山さん、大丈夫かい？」

見回りに来た先生に声をかけられた。

「分からないところがあつたら、どんどん質問に來いよ」桃花の本当の心配をよそに、応援してくれた。一瞬意識がそらされ、少し楽になつた。私たちはブルーギルズだ、ここで逃げてちゃだめだ！ と気合を入れ直した。

残っていた問題を一気に仕上げ、丸付けをする。満点だった。赤ペンを置いて、天井を見上げた。

「たまちゃんのことを、これからよろしく願ひします」

脳裏に高坂さんの依頼が蘇つてきた。